

第 57 回大会を終えて

第 57 回大会は、10 月 13 日（日）14 日（月）に福岡大学で開催されました。会員のみなさまのご協力のおかげで無事に開催できましたことを感謝申し上げます。10 月のこの日程を選んだのは、九州に多い 9 月の台風を避けるためでした。お陰様で開催日は両日とも秋晴れの晴天で、その前後に台風が頻繁に来たことを思えば全く天候に恵まれた開催でした。ただ、人が考えることは全く同じで、教育哲学会、教育行政学会などの全国大会などと開催日が重なりました。また九州での開催であったこと、私立大学を中心に 14 日の祭日が授業日になっていたこともあって、56 回大会（お茶の水女子大）の 318 名に比べて大幅な参加者減がありました。参加者は会員が 212 名（一般 171・学生 41）、臨時が 23 名（一般 11・学生 12）で 235 名でした。

研究発表の申し込みは 52 本（56 回大会は 68 本）で、13 分科会を持ちました。初日が 5 分科会、2 日目の午前午後それぞれ 4 分科会です。西洋の申し込みが少なく、3 分科会で 12 本でした。近年、西洋の発表が少ないことから、名誉教授の立場におられる会員の方々が学会を梃子入れすべくご報告してくださいました。分科会は、出来る限り類似したテーマを集めようと努力しましたが、報告内容がバラバラの分科会が少なくなく、司会を担当して下さった会員にはご迷惑をおかけしました。研究発表では欠席者は一人もなく、分科会開始時における遅刻者もほとんどなかったことが幸いでした。

コロキウムは 4 つで、これだけは前回大会（3 つ）を上回りました。コロキウムは 2 日目の 15 時から開催なので、九州という遠方であることから会員が残ってくださるのかと危惧しておりました。ですが、主催者のテーマが大変興味深いものばかりだったので、教室が満杯になるほどたくさんの方が参加してください安堵しました。

シンポジウムは、「大学の歴史を大学教育の視点から振り返る」とテーマを設定しました。近年、大学の教育改善として大学改革が矢継ぎ早に進められています。改革によって大学教育がむしろおかしくなっているのではないかと感じられることが多々あるかと思えます。とくに大学で培うべき教養が、即戦力的なグローバル人材育成の名の下に蔑ろにされているのではないかと。そもそも大学は歴史的に大学教育をどう捉え、どのような教養教育を行ってきたのか。以上の問題意識から課題設定をしたのです

が、大学史から現在の大学教育を振り返るのか、現在の大学教育から大学史を振り返るのかが、曖昧なままに混在しており、それがシンポジウムでの論議を混乱させた主要因となったことを深く反省しております。シンポジストはベテラン、中堅、若手の会員にそれぞれコメント、日本、イギリスの大学教育論を語っていただきました。相当なご準備をしてご報告いただいたことを感謝致します。また指定討論者や司会をお引き受けいただいた会員にも感謝申し上げます。

懇親会には、86 名の参加（内、学生 21 名）がありました。当初の予定より大幅な参加者減が予想されたので総会等で参加を呼びかけたところ、急遽ご参加くださった会員の方々が多数おられ有り難く思いました。懇親会では、会に先立ち私が顧問をしている和太鼓サークルの学生たちに演奏させたところ、大変好評でした。また彼らに道案内などの大会スタッフもやらせたところ、「学生さんがきびきびしていて、さわやかだった」とのお褒めの言葉をいただき感激しております。

それから、書店コーナーに知的障がい者の授産施設「アットホーム」を出店させていただきました。会員のみなさまにご協力をお願いかけたところ、予想以上の売り上げがあり、会員のみなさまのあたたかさを感じました。ありがとうございました。

さて、昨年 57 回大会開催の依頼があったとき、学会員は私一人。もう一人いた頼みの学会員は関東の大学に転出。急遽、大学院生の高橋さんに学会員になってもらいましたが、「引き受けたのは、よかばってん、どげんして開催すつとや？」と頭を抱えておりましたところ、56 回大会開催委員長の米田理事から懇切丁寧な開催マニュアルを拝受しました。これだけの内容をまとめるのに、どれくらい時間がかかったかと考えると、米田理事のご厚情に感謝しました。米田理事は、お茶の水女子大学で他の大会スタッフと共に説明会をして下さった他、開催直前まで何かとご助言、ご指導くださいました。57 回大会は、基本的には 56 回大会の手法をそっくりそのまま踏襲いたしました次第です。

本来なら開催実行委員長として分科会やシンポジウム、コロキウム等に参加しながら、大会全体の内容を把握すべきなのですが、福岡大学職員で大会スタッフは私一人。何かと走り回らねばなりません。それ故、大会の内容について十分には知るこ

とが出来ませんでしたが、会員の方からは、大会の条件整備については満足した旨をおっしゃっていただくことが多く、胸をなで下ろしています。もちろん反省点は多々あり、58回大会には注意事項として引き継いでいく所存です。

最後に、57回大会は米田理事はじめ会員各位のご配慮と学会事務局のサポート、大学院生の高橋さんの奮闘努力が無ければ開催できませんでした。ここに記して感謝申し上げます。また、開催準備にあたり学生アルバイトを多く使ったことと、参加者がそれほど多くなかったため大会の決算が厳しくなっ

ています。理事会等において何らかのご配慮をお願いすることになるかもしれませんが、宜しく願い申し上げます。

58回大会は日本大学で開催です。私たち福岡大学関係者は、福岡大学をよくご存じない方に、日大のネームバリューを拝借して「九州の日大です」と称させていただきます。次回は「本家」での開催です。大会のご成功を祈念致します。

第57回大会実行委員長
勝山吉章（福岡大学）

総 会 報 告

2013年10月13日午後1時より福岡大学A棟4F A401にて今年度の総会が開催された。まず辻本雅史代表理事より、続いて大会準備委員長勝山吉章会員より挨拶があった。議長団として羽田積男会員、佐喜本愛会員が選出され、議事が進行された。審議事項は全案件が原案通り承認された。

【報告事項】

1. 第56回大会年度会務報告

(1) 第56回大会年度中の会員異動

年度当初会員数907名、入会数31名、退会者数21名、年度末会員数917名

(2) 第56回大会の開催

2012年9月22日、23日に、お茶の水女子大学で開催された。参加者数は318名であった。

(3) 『会報』の発行

2012年11月25日、および2013年5月25日に『会報』を発行した。

(4) 理事選挙、代表理事選挙、機関誌編集委員会選挙の実施

理事選挙を2013年6月12日公示、7月12日を投票締切とし、7月18日に開票を行った。

代表理事選挙、機関誌編集委員会選挙を2013年7月30日公示、8月9日を投票締切とし、8月19日に開票を行った。

なお、結果については「報告事項2」にゆずる。

(5) 『日本の教育史学』第56集の刊行

2013年10月1日付で発行した。発行部数1150部。

(6) 理事会の開催

第1回 2013年3月30日 上智大学

報告事項 事務局会務報告／5学会合同シンポジウム関連についての報告／『日本の教育史学』第56集編集経過について／第56集書評編集経過／第56回大会決算報告／第57回大会準備状況／第58回大会開催校について／その他、寄贈本など

審議事項 書評委員の選出について／国際交流委員会より提案／入会・退会者の承認／その他、選挙関係について

第2回 2013年10月12日 福岡大学

報告事項 第57回大会準備状況／会務報告／各種委員選挙結果等について／『日本の教育史学』第56集編集委員会報告／第3回研究奨励賞選考結果について／第56集、第57集 書評委員会報告／国際交流委員会報告／その他

審議事項 第56回大会年度決算及び監査報告について／第57回大会年度事業計画と予算について／新海外特別会員；ハンス・マルティン・クレーマー（ハイデルベルク大学哲学部日本学科教授）、ハン・ヨンジン（高麗大学大学校師範大学長）の承認／機関誌の印刷所の選定について／入会・退会者の承認／その他 第58回大会開催校について／第3回研究奨励賞授賞式について／総会の運営について

その他

2. 各種選挙結果について

以下の選挙結果が報告された。

■代表理事

新谷 恭明

■会計監査

高橋 陽一：(日) 武蔵野美術大学

柏木 敦：(日) 兵庫県立大学

■新理事

荒井 明夫：(日) 大東文化大学

一見真理子：(東) 国立教育政策研究所

大戸 安弘：(日) 横浜国立大学

沖田 行司：(日) 同志社大学

小野 雅章：(日) 日本大学

梶山 雅史：(日) 岐阜女子大学

川村 肇：(日) 独協大学

木村 元：(日) 一橋大学

木村 政伸：(日) 新潟大学

小玉 亮子：(西) お茶の水女子大学

駒込 武：(一) 京都大学

小山 静子：(日) 京都大学

坂本 紀子：(日) 北海道教育大学函館校

清水 康幸：(日) 青山学院女子短期大学

新保 敦子：(東) 早稲田大学

新谷 恭明：(日) 九州大学

鈴木 理恵：(日) 広島大学

橋本 美保：(一) 東京学芸大学

広田 照幸：(一) 日本大学

船寄 俊雄：(日) 神戸大学

前田 一男：(日) 立教大学

宮本健市郎：(西) 関西学院大学

八鍬 友広：(日) 東北大学

湯川嘉津美：(日) 上智大学

湯川 次義：(日) 早稲田大学

米田 俊彦：(日) お茶の水女子大学

■第57集・58集 機関誌編集委員

高橋 陽一：(日) 武蔵野美術大学

八鍬 友広：(日) 東北大学

船寄 俊雄：(日) 神戸大学

米田 俊彦：(日) お茶の水女子大学

古川 宣子：(東) 大東文化大学

佐野 通夫：(東) こども教育宝仙大学

勝山 吉章：(西) 福岡大学

中村(笹本)雅子：(西) 桜美林大学

谷 雅泰：(一) 福島大学

橋本 昭彦：(一) 国立教育政策研究所

3. 『日本の教育史学』第56集の刊行

機関誌第56集を担当した委員会（木村政伸委員長）より以下の報告があった。

投稿総数30本、受理26本（日本17、東洋2、日本・東洋1、西洋6）であった。9月10日に印刷・製本完了。9月25日、発送終了。奥付の刊行日は、2013年10月1日、総頁数193頁。投稿要領について改正案が出された。

4. その他

【審議事項】

1. 及び2. 第56回大会年度決算及び審査

事務局より、資料（別掲「第56回大会年度決算報告案 4頁」）に基づいて説明され、引き続き監査報告がなされ、両案とも異議なく承認された。

3. 第57回大会年度予算

事務局より資料（別掲「第57回大会年度予算案 6頁」）に基づいて説明され、異議なく承認された。

4. 第58回大会について

辻本代表理事より第58回大会開催校について日本大学で開催したい旨が提案され、承認された。

以上をもって議事はすべて終了した。審議事項4をうけて、第58回大会準備委員長の小野雅章会員からご挨拶を頂いた。最後に、今年度が役員改選年度であるため、代表理事退任挨拶として辻本雅史会員より、また新代表理事就任挨拶として新谷恭明会員よりそれぞれご挨拶いただき、第56回大会総会は閉会した。

【第3回教育史学会研究奨励賞授与式】

総会の前に第3回教育史学会研究奨励賞の授与式が行われた。授賞者と授与論文は次の通り。（敬称略）

須永 哲思

「小学校社会科教科書『あかるい社会』と桑原正雄-資本制社会における「郷土」を問う教育の地平」

平野 亮

「能力心理学としての骨相学-能力概念形成史の視角から見たその教育史的意義」

受賞者の須永哲思会員、平野亮会員に、辻本代表理事より賞状と賞金が授与され、授賞者のスピーチが行われた。

第 56 回大会年度決算報告

収支計算書 (2012.9.1 ~ 2013.8.31)

収入

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
会費	56回年度個人会費	4,037,500	3,945,000	-92,500	納入者789名 納入率78%
	過年度個人会費	500,000	750,000	250,000	
	小計	4,537,500	4,695,000	157,500	
機関誌等 販売収入	機関誌収入	294,000	303,555	9,555	日本図書センターに委託 計118冊
	50周年記念誌販売収入	26,250	8,000	-18,250	日本図書センターに委託 計32冊
	小計	320,250	311,555	-8,695	
雑収入	受取利息	1,200	1,023	-177	
	情報・システム研究機構	100,000	135,830	35,830	
	小計	101,200	136,853	35,653	
当年度収入合計 A		4,958,950	5,143,408	184,458	
前年度繰越金 B		12,212,351	12,212,351	0	
収入総計 C=A+B		17,171,301	17,355,759		

支出

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	997,596	-152,404	第56回大会（お茶の水女子大学）
編集費	機関誌刊行費	680,000	680,000	0	第55集印刷費（1,150部）
	編集複写費	10,000	2,885	-7,115	
	編集交通費	600,000	341,910	-258,090	奨励賞選考委員会1,840
	編集会合費	50,000	42,442	-7,558	委員会昼食代@1,000 茶菓
	編集通信費	30,000	32,330	2,330	投稿案内8,240 書評委員会9,220
	編集消耗品費	5,000	4,341	-659	
	編集謝金	140,000	64,000	-76,000	英文校閲8,000*8本
	編集人件費	200,000	200,000	0	
	編集雑費	5,000	0	-5,000	
	書評等原稿謝金	15,000	5,000	-10,000	非会員5,000*1名
	書評用図書購入費	70,000	73,750	3,750	書評委員10,000*7名 献本用書籍3,750
	振込手数料	1,500	525	-975	
	小計	1,806,500	1,447,183	-359,317	
	事務局経費	人件費	950,000	1,031,500	81,500
旅費交通費		800,000	858,360	58,360	理事会428,880、合同シンポジウム、80,480、教育関連協議会53,320 他
会合費		40,000	59,785	19,785	上智大会会場48,680 他
奨励賞関係費		210,000	201,957	-8,043	奨励賞副賞50,000*4名
通信運搬費		350,000	560,958	210,958	会報送料109,200（112,113号） 機関誌送料88,830 選挙関連資料発送102,120 他
消耗品費		60,000	25,045	-34,955	
印刷製本費		200,000	368,760	168,760	会報233,410 選挙関連印刷物102,375 他
手数料		50,000	56,620	6,620	会費送金52,175 他
HP管理運営費		80,000	80,000	0	
名簿刊行費		0	0	0	
小計	2,740,000	3,242,985	502,985		
国際化促進関係費	旅費交通費	600,000	49,880	-550,120	
	謝金	100,000	0	-100,000	
	印刷代	100,000	0	-100,000	
	通信運搬費	50,000	0	-50,000	
	会合費	40,000	0	-40,000	
	消耗品費	10,000	0	-10,000	
小計	900,000	49,880	-850,120		
雑支出	雑支出	10,000	0	-10,000	
予備費	予備費	200,000	15,824	-184,176	教育関連学会会費10,000他
当年度支出合計 D		6,806,500	5,753,468	-1,053,032	
当年度収支差額 A-D		-1,847,550	-610,060	1,237,490	
次年度繰越金 E=C-D		10,364,801	11,602,291	1,237,490	
支出総計 D+E		17,171,301	17,355,759	184,458	

貸借対照表 (2013. 08. 31 現在)

資産

単位：円

費目		金額	備考
現金	現金	1,248	
預金	郵便振替	4,254,738	
	ゆうちょ銀行	700,307	
	ゆうちょ銀行定額貯金	5,000,000	
	福岡銀行	75,309	
	西日本シティ銀行	5,194,134	
	小計	15,224,488	
前払・仮払	大会前払仮払金	1,150,000	第57回大会 (福岡大学)
立替・未収金	機関誌等販売収入	311,555	日本図書センターより売上金
資産総計 F		16,687,291	

負債・積立金および繰越金

単位：円

費目		金額	備考
前受金	57回年度会費	5,000	5,000*1名
	小計	5,000	
積立金	将来計画積立金	5,000,000	ゆうちょ銀行定額貯金
未払い金	HP運営費	80,000	HP運営費 (石橋様)
負債・積立金合計 G		5,085,000	
第57回大会年度への繰越金 H = F - G		11,602,291	
負債・積立金・繰越金総計 G + H		16,687,291	

会計監査報告

第56回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2013年9月14日

監査 柏木 敦 ㊟

監査 高橋陽一 ㊟

第 57 回大会年度予算案

収入

単位：円

費目		57回予算	56回決算	備考
会費	57回年度個人会費	3,825,000	3,945,000	5,000*900名*85%
	過年度個人会費	500,000	750,000	
	小計	4,325,000	4,695,000	
機関誌等 販売収入	機関誌販売収入	210,000	303,555	2,100*100冊
	50周年記念誌販売収入	5,250	8,000	250*20冊*1.05
	小計	215,250	311,555	
雑収入	受取利息	1,200	1,023	
	情報・システム研究機構	0	135,830	
	小計	1,200	136,853	
当年度収入合計 A		4,541,450	5,143,408	
前年度繰越金 B		11,602,291	12,212,351	
収入総計 C=A+B		16,143,741	17,355,759	

支出

単位：円

費目		57回予算	決算	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	997,596	
編集費	機関誌刊行費	720,000	680,000	第56集印刷費(1,150部)
	編集複写費	10,000	2,885	
	編集交通費	600,000	341,910	奨励賞選考委員会旅費150,000
	編集会合費	50,000	42,442	
	編集通信費	40,000	32,330	
	編集消耗品費	5,000	4,341	
	編集謝金	100,000	64,000	
	編集人件費	200,000	200,000	
	編集雑費	5,000	0	
	書評等原稿謝金	15,000	5,000	5,000*3本
	書評用図書購入費	70,000	73,750	
	振込手数料	1,500	525	
	小計	1,816,500	1,447,183	
事務局経費	人件費	940,000	1,031,500	幹事840,000 アルバイト100,000(紀要等発送、電子化補助等)
	旅費交通費	700,000	858,360	
	会合費	40,000	59,785	
	奨励賞関係費	210,000	201,957	第2回研究奨励賞(第55集) 副賞50,000*4名 賞状2,500*4名
	通信運搬費	400,000	560,958	
	消耗品費	60,000	25,045	
	印刷製本費	200,000	368,760	会報等印刷費
	手数料	50,000	56,620	
	H P 管理運営費	80,000	80,000	
	名簿刊行費	240,000	0	
	小計	2,920,000	3,242,985	
国際化促進関係費	旅費交通費	600,000	49,880	
	謝金	100,000	0	
	会場費	0	0	
	印刷代	100,000	0	
	通信運搬費	50,000	0	
	会合費	40,000	0	
	消耗品費	10,000	0	
小計	900,000	49,880		
雑支出	雑支出	10,000	0	
予備費	予備費	200,000	15,824	
当年度支出合計 D		6,996,500	5,753,468	
当年度収支差額 A-D		-2,455,050	-610,060	
次年度繰越金 E=C-D		9,147,241	11,602,291	
支出総計 D+E		16,143,741	17,355,759	

コロキウムから

〔1〕「東京教育大学における日本教育史研究の系譜」 備忘録

逸見 勝亮（北海道大学名誉教授）

1、質疑応答の「意識」的概括

- ①唐澤先生と院生との関わり方は：修士論文テーマの確認程度。
- ②唐澤先生の「教育史研究会」*に対するスタンスは：距離をおいていた。
*『近代教育史ノート 近代教育史（全3巻）付録』（誠文堂新光社、1979年）に、浜田陽太郎・海老原治善・石川松太郎が「近代教育史研究会」の回想を載せ、石川は海後宗臣を中心とする東大グループに言及した。『近代教育史』初版は1951～1956年。
- ③花井らが日本教育史研究会を組織した理由は（東京教育大出身者の集まりか）：参加者の出身大学は多様。日本教育史研究の課題と方法に関する危機感から企図した。
- ④石島・森川・花井らの地域研究の発想はどこから：歴史は地域調査に入るものとの常識があった。日本史ゼミ・自治体史編纂に参画する中で問題関心も磨かれ方法も鍛えられた。
- ⑤東京教育大学の日本教育史研究の「系譜」はあるのか：ない。とはいえ、「系譜」は属人的に、しかも研究の高い水準として、石島+今日の報告者たちに体现されている。
- ⑥「系譜」よりは「学風」が重要ではないか。

2、参加者の感想断片

報告者諸兄の魅力と「類書」なき故だろうか、60名を超す参加者があった。

10人ほどの方から、「おもしろかった」、「ここできなければ聴けない話」、「研究の系譜を把握するのは必須の教養と思って参加した」、「（系譜という場合）唐澤さんの仏教教育史研究の議論が大事だったのに、未検討のまま残ってしまって残念だ」、「緊張感と関心を持って聴いた」、「地域研究の系譜を確認した」、との感想をうかがった。

3、報告者に書いてもらった感想

＜森川輝紀＞唐澤富太郎という巨人。学会にかかわらず、さりとて無視しえない存在。1冊の本を丸ごと受けとめるしかない、やっかいな存在。特定のテーマ、課題、実証にかかわって先行研究になりがたく、それでいて無視は出来ない。

そんな“不可思議”な、それだけに奥深い存在ではなかったのか。“不肖の弟子”ながら、唐澤教育史学の再構成と後継の関係について、考える機会を与えられ、多くの参加者を得て討論できたことは、幸運なことであった。

＜花井 信＞唐澤先生の生活教育史はペスタロッチの影響をうけたと森川さんが指摘なさったことを借りれば、ペスタロッチが民衆教育の偉人でありますように、生活教育史は立派な民衆教育史です。不肖の弟子にすぎないものが、ヘーゲル左派を気取りましたが、厳格なディスプリンを受けていたら、わたしは間違いなく脱落していたでしょう。抒情的アカデミズム—歴史は物語というお話がありました—を乗り越えることはできそうありません。

＜八鍬友広＞石島庸男氏を再確認する機会になりました。ありがとうございます。追加三点。①石島氏の指導教員が石川松太郎氏であったというのは事実でしょうか。お教え下さい。②石島氏は晩年、本気で古物商免許を取ろうとしていたようで、このあたりは、唐澤ゆずりかもしれません。③石川謙・松太郎両氏のご研究について、『古往来についての研究』『庭訓往来についての研究』を別の視点から読み返すと、案外面白いということを書き忘れました。

4、ご案内少々

企画者の感想は、東京教育大学唐澤富太郎研究室をこじ開け、最良の学的蓄積を識るには、「本物の不肖の弟子が必要だった」である。

下記宛にメールをくだされば、当日配布資料をメールに添付してお送りする。

hemmi@edu.hokudai.ac.jp

参加者の皆さんにお礼申し上げ、3人の報告者には改めて敬意を表する。

なお、第58回大会では、海後宗臣を中心とした東京大学教育学部における日本教育史研究の系譜について、報告を寺崎昌男氏に、指定討論を駒込武・宮澤康人両氏にお願いしてコロキウムを企画中である。御三方にはすでに了解を得ており、残るは企画申請のみである。

〔2〕近代日本における教育情報回路と教育統制に関する研究 (2) —教育情報回路の重層化 1910—1920 年代—

梶山 雅史 (岐阜女子大学)

このコロキウムは戦前における最大の教育団体・組織であった中央・地方教育会の活動実態から近代日本教育行政史の再検討を目的とするものであり、本年度で9回目の開催となる。今年度は1910—1920年代に焦点を当てた。

大正時代の相対的にリベラルな社会的風潮を受け、郡市教育会を中心として大正自由教育が導入されるが、治安維持法、思想善導政策の強化、世相の急変とともに教育情報回路としての教育会は教化総動員運動の重要な組織として組み込まれることになる。教育会による教員に対する統制が浸透していくプロセス、その重層的メカニズムの解明をめざす。

梶山から上記の趣旨説明を行った後、佐藤高樹会員と須田将司会員による二つの報告をうけて、自由な議論、意見交換を行った。約20名の参加と活発な議論を行うことができた。

佐藤会員は「教師の教育研究活動の拡がり」と地方教育会—東京府を事例に—と題し、大正新教育と教師の教育研究活動に着目した報告を行った。当時、東京府の教育会は関東連合教育会や全国教育者大会など全国的な拡がりを持つ組織との連携を強め、教員社会の団結、教育世論の統一を主要な活動方針とした。その結果、東京府においては新教育に関心を持つ若年層の教育会離れが進み、新教育実践にとりくむ教師達は教育会の外に自らの組織と活動の場を求めていった。この新たな動向について興味深い資料提供がなされた。

須田会員は「大正期福島県全域における郡内方部会・郡市連合教育会の展開」と題し、郡制廃止前後の郡市レベルの教育会の動向について報告した。この時期、地域における教育会組織が整備され、その裾野が郡市・区町村というレベルに拡大していく一方、教員会や教育研究会という形で教師の教育研究の組織化が同時に進行し、教育会の機能分化が進む。県教育会の下に置かれた郡レベルの部会や町村レベルの支会が盛んに講習会を開催し、准教員養成に係わり、また講演会などにおいても県教育会と同様の活動を展開していた。こうした動きは、郡制廃止後には町村教育会結成となって展開し、郡市連合教育会は実態を失っていく。町村教育会が地方教育会の担い手になっていく経緯が明らかにされた。

1910年から1920年代の地方教育会の活動は、福島の場合は町村教育会という小規模の組織の活性化

が見られるが、東京府の場合は全国的組織との組織的連携に重点が置かれ、いわば組織上層部の活性化が見られ、対照的な動向があったことが明らかになった。

参加した会員からは様々な意見が出されたが、2点に絞って論点を紹介する。第1点は、そもそも「新教育」をどの時点から始まるものと考えたらよいのか、という問題である。「新教育」という言葉が教育会雑誌の中に頻繁に登場するが、その実態については議論されない場合が多い。各地の教育会雑誌に見られる「新教育」がどのような読まれ方をし、どのように受容されたのか、そしてどのような実践がつくり出されたのか、各地の実態について比較検討を深める必要がある。

第2点は、昨年度のコロキウムから議論されている教育会の「重層化」という概念をめぐってである。府県教育会と郡市教育会はずでに明治20年代からそれぞれ独自に存在しており、この時期の教育会の活動について、改めて「重層化」という概念を使用する意義と有効性に関する議論である。須田会員からは、町村教育会が独自の、しかも県教育会と類似した活動をしている事実から、全国—府県—郡市—町村とそれぞれのレベルでの活動が見られ、とくに町村レベルでの活動が活発化する。この意味では、さしあたり「多層化」という言葉が相応しいとの回答があった。教育会が昭和期には翼賛的な「第二の教育行政網」として駆動することからすれば、全体として見た場合、各レベルにおける多様性も全体主義へと回収される。この事実を言い当てる言葉として「重層化」を使用しているが、この概念使用については、地方教育行政史を踏まえて引き続き検討したい。

最後に、今年も充実した研究交流の場が生まれたこと、また大会2日目の遅い時間まで参加していただいた会員諸氏に感謝する。

〔3〕教育のなかの宗教・古典・道徳

—ハプスブルク君主国の場合—

長谷部 圭彦 (駒澤大学等非常勤講師)

宗教や古典や道徳は、前近代における教育の中核をなすと考えられるが、一般に「近代的」とされる新しいタイプの学校においては、どのような機能を担っていたのであろうか。本コロキウムは、こうした宗教や古典や道徳に関する諸問題を比較史的に議論しようとするものであり、本年度は、言語的にも宗教的にも領域的にも多様な要素から構成され、ま

さにその点において興味深い事例となることが予想されるハプスブルク君主国を対象とした。

まず石井大輔氏から、「イエズス会教育とエリート層の育成」と題する、17世紀を対象とする報告がなされた。石井氏は、イエズス会による学校教育の特徴と、ハプスブルク君主国における同会の活動について概観された後、具体的な事例としてリンツのイエズス会学校をとりあげ、同会による教育を受けたエリート層が民衆の「宗派化」を推し進めたこと、そしてイエズス会が受容された背景には貴族や都市の要望も存在していたことなどを指摘された。

続いて上村敏郎氏が、18世紀を扱う「啓蒙期の教育改革」と題する報告を行い、一般学校令（1774）で知られるフェルビガーによる改革と、ヨーゼフ2世による一連の改革を概観しつつ、古典教育の変遷についてとくに検討された。そして、古典教育は啓蒙期においても基本的に温存されたが、それは教養としてというよりも、むしろあらゆる知識を習得できる言語として重視されたこと、しかしながらヨーゼフ2世期にその地位が相対的に低下したことなどを指摘された。

両氏の報告を承けて、長谷部圭彦会員は、ハプスブルク君主国と和戦両様の関係にあり、しかも同国と同様に多元的な社会を有したオスマン帝国の事例を紹介しつつ、ハプスブルク君主国における教育の社会的機能について質問した。これに対し石井氏は、教育の基本的な役割は規律化された臣民の創出にあり、イエズス会によるカトリシズムや教育は、君主国の統合を支える基盤ともなつたと応答された。他方上村氏は、規律化という点においては18世紀も同様であるが、この時期は、教育は国家に資すべきものであるという見方や論理が強調され、しかも啓蒙主義の浸透にともなつて、宗教ではない別の統合原理が要請されるようにもなつたと答えられた。

フロアを交えた討論では、臣民の統合と宗教に関する問題などが討議された。用語の使い方などをめぐって、歴史学と教育学のある種の溝を意識せざるを得ない場面もあったが、企画者の一人として、本学会のコロキウムは、歴史学と教育学を架橋し得る貴重な場であること、そして言葉の本当の意味での比較を進めることが、そのような橋渡しをさらに魅力的なものにすることを強調したいと思う。会員でないにもかかわらず報告を引き受けてくださった石井氏と上村氏、そして参加された会員諸氏に御礼申し上げます。

[4] 新教育運動と幼児教育—日中の比較—

湯川 嘉津美（上智大学）

本コロキウムでは、「新教育運動と幼児教育」というテーマのもと、陳鶴琴と倉橋惣三の二人の人物を取り上げ、1920年代から40年代における中国と日本の幼児教育改革の動向について、欧米の新教育運動の影響に着目しながら、比較検討を行った。

中国については、一見真理子会員が「中国新教育運動における幼児教育改革—陳鶴琴の場合—」と題する報告を行った。中国は日本をモデルに近代幼児教育の導入を図るが、1920年代に入ると、アメリカでデューイ、ソーンダイク、キルパトリックらに師事した陳鶴琴（1892-1982）によって、新教育の理念に基づく幼児教育改革が進められた。実験幼稚園（南京鼓楼幼稚園）の設立（1925）、農村での幼児教育教師の養成（1927-30）、進歩主義的内容を盛り込んだ「幼稚園課程基準」（1932）制定への寄与など、陳は中国幼児教育界のリーダーとして活躍し、抗日戦下の1940年には江西省で省立幼稚師範学校を創立、さらに、中国における新教育理論の到達点といえる「活教育」理論の体系化を図った。1950年代初頭におけるプラグマティズム批判の際には、真つ先に陳に批判の矛先が向けられ、そのブルジョワ的性格が激しく批判されたが、1980年代には再評価がなされるようになり、昨年、生誕120周年を祝う行事も催された。

日本については、湯川が「日本における保育理論の構築と国民幼稚園論の展開—倉橋惣三の場合—」と題し、陳と同じく、留学を機にアメリカの新教育理論に基づく保育理論（誘導保育論）を構築し、幼児教育界のリーダーとなった倉橋惣三（1882-1955）の1920年代から40年代の保育理論の展開について報告した。倉橋は1930年代後半にはドイツの文化教育学に依拠して、子どもの生活から文化を発展させていく途を模索し、1940年代に入ると、さらに国民幼稚園論を展開して、国民教育との関係で幼児教育のあり方を論じるようになるが、戦後はそれらの試みを放擲し、もっぱら幼児の自発生活を重んじる「自発保育」を主張する。そして、倉橋もまた1990年代に再評価がなされ、その保育思想は現代に生きる保育思想として見直されるに至っている。

二つの報告に対して、コメンテーターの小玉亮子会員からは「共時的幼児教育史研究のために」として、日中の幼児教育の共時代的動きをどう捉えるのかといった問題提起がなされ、(1) 1920年代の幼児教育方法論・カリキュラム論—特にデューイ理解

をめぐって、(2) 1930年代～40年代における幼児教育と国家論について、陳と倉橋の共通点と相違点を彼らの思想的・社会的背景を含めて検討することが提案された。そして、この2点を中心に参加者を交えて盛んな議論が展開された。

教育史学会において、新教育運動と幼児教育というテーマで日中比較を行うのは初めての試みであっ



たが、日本、西洋、東洋の研究者17名の参加を得て、日中の比較だけでなく、欧米の幼児教育改革の動きも視野に入れて日中の幼児教育改革の動向を捉えようとする議論もなされた。小玉会員による「共時的幼児教育史研究」の提案は魅力的であり、そうした視角からの研究に共感を覚えつつ、コロキウムを終了した。



大会参加記

[あいうえお順]

第57回大会に参加して

遠藤 孝夫 (岩手大学)

台風の合間の晴天の下、福岡大学を会場として開催された第57回大会に参加した。まずは、大会の企画・運営の重責を担われた、勝山吉章先生をはじめ大会実行委員会の皆様に、心より感謝申し上げたい。勤務先の仕事の都合で、2日目の発表を聞けなかったことは大変残念だった。ここでは、紙幅の制約を考慮し、司会を担当していた関係で質問や意見を述べる機会がなかった、1日目午前の第1分科会の研究報告に限定して、簡単に個人的感想を述べていただくこととする。

西洋教育史、とりわけドイツに関連した研究発表が激減傾向にある中で、今回の第1分科会の4件の報告は、いずれもドイツ及びオーストリアの教育史研究に関連したものとなった。まず、小玉会員の報告は、ヴァイマル憲法119条(多子家族の扶助請求権)を根拠に設置された「多子家族連盟」の機関誌の記事や広告の変容に着目して、ヴァイマル期からナチズム期にかけての家族や母性をめぐる言説の特質を解明しようとするものであった。フロアからの質問にもあったように、端的には「ユダヤ人家族」に焦点づけて分析することで、実り豊かな知見の創出が期待できるものと感じた。続く清水会員の報告

は、保守革命論の総合雑誌“Die Tat”の記事分析を通して、「ドイツ固有の保守主義的思想の果実」として改革教育(学)運動を再評価しようとするものであった。ヴァイマル期に強調されていたという「ドイツ的なもの」の内実とは何か、またそのことがナチズムとは如何なる文脈において通底するのか等々、興味が尽きない報告であった。

さらに津田会員からの報告は、1970～80年代のドイツの教育学にチョムスキーのコンピテンツ概念が如何に受容され展開されたのかを分析したものであった。OECDのPISA調査以降、我が国の教育界では、「リテラシー」にはじまり「コンピテンシー」、そして「コンピテンツ」と、類似した概念が明確な定義づけを欠落したまま使用されている。今こそ、言葉や概念に厳格な教育史研究者の出番なのかも知れない。最後に鈴木会員からは、第2次大戦後のオーストリアの体育の再建過程は、一面では第1次大戦後の主流であった「自然体育」を再興するものであるが、同時に「自然体育」の限界の克服をも目指すものとなったことが、体育館の付設状況に着目して報告された。ドイツに比してオーストリアの教育史研究は極めて少ない状況にある。同じくナチズムの洗礼を受けた両国では、ナチズム期の前後で、教育やその思想をめぐって如何なる連続や非連続があったのか、比較考察することから、新たな地平が開示さ

れるかも知れないと感じた。今後に期待したい。

大会参加記

越水 雄二 (同志社大学)

福岡大学での第 57 回大会を私はとても楽しみにしていた。ご縁があり熊本大学に 5 年間勤務した私は、ずうずうしくも九州を第二の故郷のように思っているからである。一年前、会報第 112 号掲載の「第 57 回大会のご案内」を私は楽しく拝読した。勝山吉章準備委員長が、開催を引き受けるに至った、新谷恭明学会事務局長とのやり取りを九州弁で記している。「ばってん、あんたとこしか頼むとこは無かけん、何とか頼むばい」。「～けん」や「～ばい」は、熊本でも、ゼミ生たちの議論が熱を帯びてくるとよく耳にした。懐かしい響きが今も心に残る。今回、大会スタッフの方々には、地下鉄の駅に立たれてのご案内から、会場に着いての参加受付、そして発表会場でと、いずれも気持ち良く対応していただいた。ご親切に感謝するだけでなく、私は九州への懐かしさも感じており、とても嬉しかった。

さて、今大会で私は、二日目の午後の部、第 10 分科会で研究発表を行った。分科会での発表（紙幅により題目は省略させていただく）の順番は、最初が私で、次は大学院生の石田治頼会員だった。石田会員は、本学会での発表は今回が初めてと伺ったが、そうは見えない落ち着いた態度に私は感心していた。続いて山内芳文会員、最後に金子茂会員が発表された。お二人のベテランによる発表を拝聴するのが目的で、分科会場に来られた会員も多かったようであり、いずれも含蓄に富んだ内容に満足されたのではなかろうか。若手とベテランの間で、私は中途半端な発表に終わり反省することばかりだったが、分科会の後、司会を務めた古沢常雄会員が「来年もまた発表しましょう」と声をかけてくださった。研究内容の充実に努めるのはもちろんだが、発表の仕方も改善するように工夫していきたい。

コロキウムでは第 3 会場の「教育の中の宗教・古典・道徳-ハプスブルク君主国の場合-」に参加した。オルガナイザーは宮澤康人会員と長谷部圭彦会員、司会は磯貝真澄会員が務めた。宮澤会員がご体調不良のため欠席されたのは大変残念だった。とはいえ、石井大輔氏と上村敏郎氏による二つの研究報告を通じて、16 世紀後半から 18 世紀後半へかけてのハプスブルク君主国における学校教育の状況と改革の動向を知ることができ、私には実に有益であった。私の専門はフランス教育史で、18 世紀を中心に思想

と実態の変化を探っているが、啓蒙時代の教育改革動向は、一国史の観点ではなく、国境に囚われない広い視野で捉えなければならない。学会員ではないゲストが報告してくださったのは、学会の枠を超えた研究上の交流を促進していく上で、ありがたいと思った。こうしたコロキウムを企画され、当日の進行にも尽力された長谷部会員に深く感謝している。

第 57 回大会参加記

駒込 武 (京都大学)

今年度の学会のシンポジウムは、小さからぬ期待を抱いて参加した。筆者も準備にかかわった第 55 回大会と同様に、大学史に関係するテーマを取り上げていたからである。シンポジウムはどうしても時間切れとなりがちである以上、それほど間をあけずに関連するテーマをとりあげる試みは斬新と感じた。しかし、参加してみて、やはりシンポジウムの企画は難しいと感じざるをえなかった。「教育」という観点から大学を問題にすることの重要さと難しさのようなものが、共有されたとは思えなかったからである。また、今回に限らないのだが、ともすれば「現状をどう認識すべきか…」「では、どうすればいいのか…」という次元の問いに引きずられがちだと感じる。現状への斬新な課題意識はもちろん大切だが、教育史研究における、新たなテーマ設定や方法論上の問題との往還関係がさらに重要なのだと思う。この往還関係それ自体を俎上に載せながら共有するには、どのような仕組みが望ましいのか。あらためて考え込まされた。

学会 2 日目午前中は第 7 分科会、午後は第 12 分科会に参加した。午前中の分科会の報告のなかには、シンポジウムとは逆に課題意識があまりに希薄、あるいは紋切り型と感じられる報告があった。沖縄における「御真影」焼失事件にかかわる事実について一定の新たな知見をえたとして、それがどのような意味で天皇制や植民地主義にかかわる従来の歴史像を革新し、今日の私たちの生活意識に反省を迫るものとなるのか…。近い領域で研究している者として、そうした次元をめぐるものがきも伝わってこないのは歯がゆく、つい噛みついてしまった。それは、こちらの性急さゆえだろうか…。

他方、午後の分科会における北海道・樺太関係の報告は興味深かった。井上高聡会員は明治初期における教育所から変則小学への転換について語り、坂本紀子会員は小学校令施行規則に準拠しない教育所が 1910 年代にも広範に存在したことを明らかにし

た。台湾や樺太の先住少数民族を対象としたものを含めて、教育所の実態、「教育所」という概念の由来や変遷を総合的に考察する必要を感じた。また、坂本会員の報告では「掘っ立て小屋」という趣の教育所の写真、小川正人会員の報告ではウタリのため中等学校という「幻」を描いた絵が印象的だった。学校が飽和の域に達しているようにも見える現在からは想像しにくいことだが、二階建ての校舎などは夢のまた夢という現実も存在した。その寒々とした空気が伝わってくるようだった。

最後に、懇親会の場で素晴らしい和太鼓を聞かせてくれた学生さんに感謝。また、「余興」にまで心を配られた準備委員会の方々にも敬意と感謝を捧げたい。どうしたら和太鼓のように身心を震撼させる研究ができるのだろうか…などと欲張りな妄想にふけりながら帰路に着くことになった。

大会参加記—研究活動の深化発展を期して

皿田 琢司（岡山理科大学）

心地よく澄んだ秋空のもと、大会案内の記載に従って商店街をてくてく歩き、地下鉄で20分余り。広々としたキャンパスに林立するガラス張りの高層建造物。エレベーターまで透明で、市街地の洒落たデパートにも似た外観を呈している。

これを目にした途端、筆者の先入観は見事に裏切られた。進学案内等で高等学校を訪れると、いわゆる受験偏差値で当大学と筆者の勤務先とを比較されることがある。岡山市も今や政令指定都市。そのせいか、両大学を規模や外観まで類似しているものと思いついていた。しかしその差は歴然（あ然…）。地元大学所属の会員によると、県内でも多数の名士を輩出されているとのこと。とても太刀打ちなどかなわない。辛うじて見出せたささやかな救いは、教員採用試験の合格者数。在学生数をもとに比較すると一応勝負にはなる。

いささか余談が過ぎた。大会第1日午前中は明治初期の教育法制・施策を中心とする第5分科会に、総会とシンポジウム、懇親会をはさんで翌第2日午前中は幕末維新期から大正期にかけての地域の教育実態史を主題とした第9分科会に、午後には中等教育段階の教育内容史を取り上げた第13分科会に、最後は教育情報回路を扱ったコロキウム2に、それぞれ参加した。研究対象の分野・領域や手法、発表方法など、かつてと比べて多様化の進んでいる点が多く、参加するたびに新鮮な印象を抱かせられる。従来型の研究にも緻密さや視点の斬新さが加わり、

参加するたびに自らの取り組みを反省させられる。

特に感激させられたのは、近世藩校の教育に関するご発表にICT技術を駆使されていた老練な（失礼！）会員のお姿である。一方で、ICT技術による史料収集の簡便化がただちに研究の意義に結びつくのかという疑義が示され、目を開かされるどころ大であった。

歴史系の研究に不可欠な史料の取り扱いについて落胆させられる場面もあった。レジュメの要所要所を音読しながら、肝腎の史料部分をすべて読み飛ばしてしまう発表である。時間制限は遵守すべきであるが、実証の要である史料が泣くことになりはしないだろうか。

大会の運営は、受付での工夫をはじめ学会員わずか2名の大学が会場とは思えないほど行き届いていた。これは、事務局との緊密な連携のみならず平素の熱心な学生指導の賜物であろう。偶然ではあるが、地下鉄車内で日本シリーズを楽しめたのも幸いであった。

今後の大会に向けてぜひご検討をお願いしたいことが3点ある。参加できずに終わった分科会のレジュメの残部を別の一室でまとめて受け取れるようにすること。食堂に用意されていた当学会員専用のコーヒーが早々になくなり、一滴もいただけず残念な思いで泣く会員の出ないよう時おり補充いただきたいこと。懇親会参加の呼び掛けを「助けると思って」に代えて地元産食材の魅力をアピールいただきたいことである。

総会か懇親会の際に某理事が当学会観について、真面目さと厳しさの2点を挙げられていた。筆者の参加ぶりは上述のように真面目ではあったかもしれないが、自らを厳しく律し積極的に取り組んだかと言われれば、疑問が残るものであった。勤務先の雑務を持ち込み、大会の合間を縫ってちまちま片付けようとするなど言語道断である。自戒したい。

キャンパス内では工事がなお進行中である。当学会員の研究よろしく拡張発展はこの先も止まらないのだろうか。自らの研究活動もあやかりたいと思いつつ会場を後にした。

第57回大会に参加して

杉村 美佳（上智大学短期大学部）

今回の大会は、幼い娘たちを連れての参加で無事に発表できるか心配であったが、福岡大学の学生の皆さんがとても親切で助かった。発表の間、子どもが待てる場所はないかと探していたところ、近隣の

図書館を紹介してくださり、近くまで案内して下さった。お陰様で研究発表も無事に行うことができた。発表では、アメリカにおける進歩主義教育運動の指導者の一人である J. メリアムの著書、*Child Life and the Curriculum* が、奈良女子高等師範学校附属小学校の木下竹次による合科学習の構想と実践に果たした役割を検討した。発表後、フロアから貴重なご指摘をいただき、今後の研究課題について得るところが大きかった。このような状況で他の研究発表もなかなか落ち着いて拝聴することができなかったが、筆者にとって特に興味深かったのは、第一日目午前の第 5 分科会場における発表と総合討論であった。

第 5 分科会では、「学制」から第二次教育令にいたるまでの教育法令や施策を対象とした実証的な研究発表が行われた。主要な分析視点は、「日本と西洋」、「中央と地方」、「告諭勸奨（就学督責）」であったと思われる。まず、栗村会員が、『佛國学制』の主な原拠史料は *Code Universitaire* であるとする神山栄治氏の仮説を立証し、さらにフランスの二つの法規集も参考にされていたことを明らかにした。これに対し、フロアからは、『佛國学制』がどれだけ「学制」の基礎資料とされたのか等を検討する必要があるという意見が出された。

次に、吉田会員が文部省設置後の海外留学生管轄問題の経緯を明らかにすることを通して、「学制」が文部省の管轄対象範囲を示し、統合する規定としての側面を持っていたことを指摘した。文部省にとって、管轄問題の提起は、「学制」の将来計画を達成するために他省からの生徒派遣を抑制する意味もあった、という指摘が興味深かった。

次いで、湯川文彦会員が、太政官・文部省・地方官の視点から、「学制」再編過程における中央・地方制度の議論とその特質を明らかにした。文部省が 1875 年に就学督責、学資金収集等は地方官の判断を基にするよう示したのに対し、学制実施に苦慮した長崎県地方官は、「説諭勸奨」を第一務として小学校の趣旨を理解させ、学資金の収集は強制せず、教員養成を重点化するという方針のもと、早期に学制再編へと舵を取ったこと等が明らかにされ、中央と地方における学制再編への動きが浮き彫りにされた。

最後に、湯川嘉津美会員が、1882 年の学事諮問会について、新たに東京府、滋賀県の答議の検討を行い、第二次教育令下の地方教育施策の実態とその課題を明らかにした。第二次教育令の実施を徹底しようとした文部省に対し、府県では、文部省に求め

られた就学督責も財政的裏打ちがないために経費負担に耐えられない等の問題を抱えており、こうした状況に対して、府県学事担当者たちが解決方策を積極的に提起し、文部省の対応を促したことが明らかにされた。

総合討論では、主に学制の再編過程で、なぜドイツではなく、アメリカをモデルとしたのか、についての議論が活発になされた。これに対して、ドイツは工業化が進んでおり、強促就学を可能とする資金力があつたが、日本にはそれがなく、住民の自治によって就学意欲を喚起するアメリカモデルが採用された、という意見が出された。

本分科会で提示された知見により、日本教育史の新たな地平が拓かれることを期待したい。

大会参加記「研究への新たな意欲を抱く」

竹村 俊哉（青森県立郷土館）

近代日本経済史を専攻している筆者が、教育史学会に入会させていただいて 3 年目になる。居住している青森県を中心に、近代における実業学校と地域経済の関わりについて研究していることから、日本教育史の勉強にもしっかりと取り組みたいという思いからである。

今大会では、実業教育を取り上げた第 13 分科会に出席した。とりわけ、旧制中学校における実業教育の実態について研究された松嶋哲哉氏と吉野剛弘氏のご発表を、大変興味深く拝聴した。松嶋氏は、1931（昭和 6）年に中学校令施行規則の全面改正によって設置された第一種課程（就職者コース）と第二種課程（進学者コース）を、吉野氏は 1908（明治 41）年に千葉中学校に設置された実業補習科をそれぞれの分析対象とし、実業学校以外における実業教育の実態を論考された。これまで、実業教育の実態を実業学校だけの分析に留まっていた筆者の片手落ちを痛感するとともに、今後取り組むべき研究課題を提示して頂いたことに深く感謝したい。

コロキウムは、門外漢ゆえ、そのタイトルに惹かれて「東京教育大学における日本教育史研究の系譜—民衆教育史への視座—」を拝聴した。東京教育大学において日本教育史講座を独立させた唐澤富太郎をめぐって、その門下生や関係者等によって報告が行われた。もとより筆者は、予備知識を持ち合わせていないので、当然ながら討論には加わることはできなかった。しかし、報告者や指定討論者が唐澤について語る敬愛に満ちた穏やかな口調から、きわめて観念的な言い方ではあるが唐澤教育史学の学風を感

じ取るよう努めた。

ところで、会場の福岡大学へは初めて足を踏み入れたが、広大なキャンパスやその環境のすばらしさに感嘆した。また、同大学院生による行き届いた会場案内や、懇親会の開幕を飾った和太鼓サークルによる生演奏は、はるばる青森県からやってきた筆者の旅の疲れを癒してくれた。

末筆ながら、このたび大会参加記を書く貴重な機会を下さった新谷恭明先生に対して心よりお礼を申し上げますとともに、筆者の力量不足による大雑把な記述に対してはご海容いただきますようお願いいたします。

第 57 回福岡大学大会に参加して

谷本 宗生（東京大学）

地方都市での大会開催といっても、福岡・博多は交通手段からみると、稀有なくらいにとっても全国各地からのアクセスが便利なところだと思います。第 57 回大会は福岡大学で開催されたこと自体に、開催校としての多大なるご尽力も含め、学会としては意義深いことであったのではないかと実感します。むしろ、開催校としての福岡大学を、福岡・九州地区に所属する学会員らが相応にサポートされたのではないかと想像します。

大会初日の懇親会での、福岡・博多ならではの思われる男女学生らによる太鼓演奏による、われわれ学会員らに対する、いわゆる“おもてなし”は圧巻であったと思います。演奏自体が音楽的にどうだったのかは分かりませんが、学生らの直向きな姿勢に胸をあつくしました。本大会のシンポジウムは、大学教育を問題として取り上げましたが、この熱き福大生らの姿勢をみても、大学の机上学問だけが大学教育ではないことが、あらためてよく分かりました。もっと参加会員の多くが、開催校によるおもてなしの懇親会にも参加されればより有意義であったろうと感じました。今大会に参加して、多くの会員らと私は交流できました。雑談から近況報告も含め、会話するコミュニケーションをとおして、これから研究を進めていくうえで実に有益であったと思います。

学会の大会では、普段自分が見聞しないような研究分野の発表会場にも気軽に参加することができるので、自身の問題関心をできるだけ深めようと試みることがあります。時代や国をこえて、教育にかかわる問題を探究しようという学会員らによる真摯な研究が多数存在していることをライブで毎年実感することができます。刊行された学会誌や紀要などを

読むことで学ぶことも研究者としては重要ですが、学会の大会で会員による研究発表を直にうかがう機会もとても貴重だと思います。研究発表の内容、問題設定も気になりますが、発表者の説明具合や受け答えの姿勢、加えて司会者による運営進行の仕方、聴講会員らを交えた質疑応答の在り方にもとても興味があります。教育空間、ヒドンカリキュラムを教育学で問題視しますが、学会の大会でも、発表会場の流れ、全体的な雰囲気にも注意します。手堅い自制的な研究が多く学会としてとても堅実であると思いますが、聴講会員からの質問に対して、しばしば今後の研究課題といたします～と即座に発表者が答えるのは、せつかくの大会発表の場でもったいない、せつかくの討論できる機会が残念ではないかなと感じました。

福岡大学での今大会に参加して多くのことを学びました。次回、日本大学での第 58 回大会でもまた新たな学びを自発的に探究していこうと考えています。どうもありがとうございました。

第 57 回大会に参加して

對馬 達雄（秋田大学名誉教授）

今回は東京圏外での開催ということで九州・福岡大学大会となり、居住地に近いこともあって悠々参加することができた。以下所感を述べてみよう。

会場校の学会メンバーがきわめて少数であったにもかかわらず、行き届いた大会運営であったように思う。地下鉄福大前の改札出口に朝 8 時には会場校の女子学生たちが笑みを浮かべ明るく「おはようございます」と出迎えてくれたため、ついつい嬉しく「おもてなし」を受けた気持ちになった。この好印象があったからでもある。

私が参加したのは初日と二日目のヨーロッパ圏対象の研究発表それぞれ 4 件と、初日のシンポジウムである。

他の関連学会との比較を抜きにすればだが、初日の発表にこれはと思う成果に接することはできなかった。尤も、それを言う前に、じり貧の当該領域に関心を抱く新人研究者を育てること、そのためにも自分自身が行動することだと思っはいる。この点で二日目の金子会員、山内会員の研究発表は、文字どおり身を以て範を示す内容であった。金子会員の発表はフランス近代教育の重要文献を素材に、論者の主張に合わせる形でつまみ食いの文献を読解する近年の傾向にたいして、基本に立ち返った作業の重要性を具体的に示したものであり、また山内会

員のそれは、人間形成と総称されるにいたった教育概念の形成史を総括する濃密な発表である。いずれも蓄積された人文的教養の深みを嘖みしめるべき内容となっている。

つぎに肝心の大会シンポジウムについてである。シンポジウムは大会の華であるにもかかわらず、近年充実した内容のものが少なくなっている。率直に言って今回もそう言わざるを得ない。テーマ設定と趣旨の曖昧さもあって、なにが問われるべき内容なのか、最後まで判然としなかった。本来、席上発言すべきなのだが、その機会を逸したためここで認めることにする。

とくに疑問に思ったのは、趣旨説明や討論の主調があたかも自明であるかのように、フンボルト流の近代大学像を前提としていたことである。だが踏まえてほしかったのは、研究と教授の自由の特権に安住したドイツ大学が著名な科学者たちを排除し学生団と教授陣もろともナチズムの牙城となってしまったこと、ユダヤ系の妻との離婚勧告を拒否してハイデルベルク大学を追われたカール・ヤスパースが、崩壊した大学の再建を念頭に『大学の理念』(1946)を著し、「国家、社会とともに変化する大学」を所与としながらすでに職業教育に優先する人間形成としての教養の重要性を提示していることである。この教養に託されたのは、自立と自己責任の成熟をうながす知の育成にあったと解していいだろう。破綻した近代大学像ではなくその反省に裏付けられた戦後の大学理念が、まずは着目されるべきであった。(なお本書は理想社から二度にわたって翻訳書が出版されている。)経団連や自民党云々の次元ではなく、現代史にもっと目が向けられてしかるべきだろう。

なお一部の個人発表について気になったのは、発表内容の位置づけが自覚されないでいることである。われわれに課せられているのは人間形成にまつわる多面的だが、史的な考察の作業にあるのだから。

それにもまして自覚すべきは、シンポジウム席上で寺崎昌男会員が強調した「人間を中心に据えることにわれわれの固有の存在価値がある」ということである。研究者として自らの立ち位置を考えるうえで、けだし至言である。当学会を多年主導された氏の遺言としてここに刻みたい。

最後に一言。高齢者会員たちの頑張りが当学会のさらなる活力を生むことを切に願う。

第 57 回大会に参加して

米山 光儀 (慶應義塾大学)

東京以外で開催される大会に参加することができたのは、久しぶりであったが、初日のシンポジウムと翌日の午前・午後の研究発表を聞くことができた。

福岡空港から直接会場に向かったが、キャンパスの要所要所にスタッフが配されており、声をかけてくれたので、広いキャンパスを迷うことなく、会場まで行くことができた。また、個人発表は、複数の教室に分かれており、いくつかの教室を移動して発表を聞くことが一般的であるが、退室・入室の誘導もうまくされていて、大会準備事務局の配慮が行き届いていた。多くの学生スタッフを統括し、参加者にストレスなく大会を運営された大会準備委員会の皆様にまずは感謝したい。

シンポジウムは、「大学教育の視点」から大学の歴史を振り返ろうとする企画であったが、議論がすすむ中で、「教養」などの問題を越えて、教育史研究および教育史学者の存在意義を問う内容になっていったように感じた。教育史学会の会員の中には、大学教育に携わるだけでなく、大学史編纂に関わる人も多いであろうが、大学史編纂は、教育史学者だけでなく、教育学以外の研究者が関わっているのが一般的であろう。その中で教育史学者は、どのような役割を果たすのだろうか。今回のシンポジウムでは、「大学教育の視点」から大学の歴史を振り返ったわけだが、個別の大学の大学史編纂において、「大学教育の視点」はどのように存在した、あるいはしているのだろうか。そして、それは大学だけの特別な問題なのであるだろうか。大学以外の学校史では、「教育の視点」は自明のもののように考えられているが、果たしてそうなのであるだろうか。そもそも「教育の視点」のない教育史はあり得ない。しかし、どのような「教育の視点」で学校の歴史が編纂されてきたのかは、改めて考えてみる必要がある。今回のシンポジウムは、専門教育からスタートしたわけではない慶應義塾の学校史編纂に関わっている私にとって、たいへん刺激的であったし、さらにいえば慶應義塾が小学校から大学までの一貫教育を標榜していることから、「大学教育の視点」のみならず「教育の視点」について考えさせられるものであった。

研究発表は、会場によって議論の活発さの度合いは異なっただろうが、発表者だけでなく、質問者もよく史料をみていることがわかることが多く、当然のことであるが、史料に当たることの大切さを再確認した。

大学では、15回の授業時間を確保するために、休日にも授業を行うことが多くなり、授業と学会が重なってしまった会員も少なくないのではないかと考える。大会の日程をどのように決めたとしても、そ

の問題を避けることは難しいが、大学教育の質を高めるためにも、学会での刺激は重要なものであると痛感した。

代表理事退任の挨拶

辻本 雅史

2013年10月13日、福岡大学での第57回大会総会をもって、代表理事を新谷恭明会員にバトンタッチできました。2010年10月から3年間、その前の森川元代表理事のもとで事務局を預かってきた3年も含めると6年間、まがりなりにも任務を全うできたとすれば、それは関係各位のご助力のおかげ以外、何もありません。心からお礼申し上げます。

ほぼ軌道に乗って走っているこの学会を、間違わずに着実に前に進めていくこと、これが代表理事としての私の役目でした。もとより学会は、年次大会を開催し会員の研究成果の発表と交流を行うこと、機関誌を発行し研究レベルを維持発展させること、そして学会の日常的業務を着実にこなすこと、この3つにあります。

年次大会は、この間、京都大学、お茶の水女子大学、福岡大学の3大学で立派に開催されました。駒込武・米田俊彦・勝山吉章の各準備委員長と関係スタッフに深甚のお礼を申し上げます。個人発表・シンポジウム・コロキウムの三本柱の枠組みも定着してきました。機関誌発行については、編集委員と書評委員各位の献身的努力が着実に誌面に反映しています。懸案だった研究動向欄廃止の一方、書評欄と図書紹介欄は、総計およそ20点の学術書をめぐって展開する密度の濃い学術批評空間に育っています。学会の会報の発行も含めた日常運営はまさに事

務局のおかげ。困難度を増す大学研究室の状況のなか、新谷事務局長とそのスタッフの日夜の下支えなくして、私の役目は一日として全うできませんでした。九州大学事務局スタッフの活気に満ちた快活さと連帯感にどれだけ元気づけられたか知れません。お礼の言葉もありません。

滑り出した研究奨励賞は若手研究者のひとつの目標となっていれば幸いです。会費の減額は実現しましたが、経常的会計状態は一段の工夫を求めています。森川代表理事時代に進められた国際化は、日常レベルでの国際化を目指して、荒井理事を中心とした国際交流委員会の努力で着実に前進しています。

また百を大きく超える教育関連学会の連携を探る動きがあります。2012年には本学会も含めた5学会合同シンポジウムが開かれ、また教育関連学会連絡協議会が2013年に結成され、教育史学会はその運営委員の一人に選ばれ、積極的役割が期待されています。

会員数は着実に増加し900名を越えました。目先の成果を性急に求める風潮の中、基礎学としての教育史研究の役割は決して減じていないと確信します。

大学院学生時に会員となって40年、本学会で学んだことの大きさを思えば、この6年間、その学会の一端を担えたことの幸せを感じつつ、お礼と退任のご挨拶といたします。

代表理事就任の挨拶

新谷 恭明

教育史学会が1956年に石川謙代表理事、梅根悟事務局長の体制で発足しました。教育史学会の最初のほぼ四半世紀はこのお二人の巨人によって牽引されてきたことはまちがいありません。私が初めての学会発表をおこなったのは梅根代表理事の時代であ

りました。あれからずいぶんと歳月がすぎ、私自身も（馬には失礼な言い方ですが）馬齢を重ねてきました。そして、その間に教育史学をめぐる状況は大きく変わったと思います。

会員のうちどれだけの方が勤務先で「教育史」を

教えているのだろうかと問えば、現在の大学教育のなかでの教育史の置かれている状況は想像がつかまず。それでも、教育史学会の会員数が減るということはありません。学会の運営は安定していますし、先年は学会費を引き下げたほどに財政的にも不安はないのです。それは教育史研究を必要とする研究者が次々と産み出されているという教育学研究の状況があるからだと言ってもよいのだと思います。

「教育史」という科目が大学で教えられているかどうか、「教育史」のポストが教育、研究組織にあるかないかの問題ではなく、教育史を研究するということが必要とされていることはまちがいのないところだと考えるべきではないでしょうか。

政治的に教育改革が進められたり、メディアで教育問題が取り沙汰されたりするなかで思いつきの教育言説が跋扈するのは昔から変わらないことです。しかし、「今」の教育問題に教育史研究はささやかながら多少の答えは出せるはずだと考えています。「今」を疑い、「明日」を考える時に歴史を問うと言うことは大切な方法のひとつだからです。そのことを私たちは歴史研究の強みとして自覚する必要があると思います。

そういう意味でも教育史研究は教育史研究として新しい枠組みを構築し、再編していく柔軟さを持た

なくてはなりませんし、そこから越境していく幅広さも獲得していかなければならないでしょう。従来日本、東洋、西洋という枠組みを超えた研究も見られるようになってきましたし、教育哲学はもちろん教育社会学、教育方法学、社会教育学等々教育諸科学との境界も越えられつつあるように思います。また、国際的な教育史の理解もこれからは必要になってくると思います。

新しい時代における新しい教育史の可能性をあたらしい教育史研究者が切り開いていってくれることに期待し、教育史学会はそうした研究を支援していく力になりたいと考えています。

あらゆることがインターネットという手段で片付くようになってきました。私が事務局長の時も代表理事は台湾に居を移されましたが、学会運営に滞りはありませんでした。あつたとすれば私の怠慢によるものだけです。今度の事務局は東北大学の八鍬友広理事にお願いしています。「♪つくしのきわみ、みちのおく♪」と唱歌にもうたわれたほど離れた代表理事と事務局の物理的距離ではありますが、教育史学会に対するまごころに距離はありません。多くは東北大学のスタッフに依存することはありますが、ここはひとつであります。

第58回大会(2014年10月4日～5日)のご案内

この度、第58回大会を日本大学(文理学部)で開催することになりました。新谷代表理事(当時は事務局長)から、開催校に依頼を受けたとき、「つい最近開催したばかりなのに。。。。」と思いました。しかしながら、よく調べてみると、前回開催したのは、第36回大会で、既に20年以上経過していることを改めて知り、お引き受けすることになりました。

日程は、2014年10月4日(土)と5日(日)の二日間とし、会場は、日本大学文理学部(東京都世田谷区桜上水)の3号館、百周年館と致しました。日本大学は、学部ごとにキャンパスが異なる、タコ足大学ですので、お間違いないようお願い致します。

日本大学文理学部教育学研究室の特色の一つに教育史研究があります。現在は、スタッフも大きく変わり、専攻も多様化しておりますが、会員は7名を数え、これに教育史を専攻する院生、さらには、他学部の会員の協力を仰ぎ、大会準備にあたらうと思っております。どうぞ、よろしくお願いたします。

会場となる日本大学文理学部は、1901年に設置

された日本法律学校高等師範科を起源としております。その後、法文学部文科、文学部と変遷し、1958年に理系学科を加え、文理学部となり、現在に至っています。全18学科からなる、日本でも最大規模の学部の一つです。日本大学文理学部は、日本大学の世田谷予科の所在地です。現在も、正門の正面に位置する一号館は、旧日本大学予科の校舎であり、現在も教室や事務局の一部として使用しています。基本的には、教室内の構造は当時のままであり、私立大学予科の教室規模が理解できます。その他の施設は、第36回大会当時とは大きく変わっております。会場を予定している3号館、百周年館も最近の施設であり、以前に比べれば、よい環境の中で大会ができるのではないかと考えております。

日本大学文理学部がある、東京都世田谷区桜上水は、その昔三井牧場があったところです。古い写真を見ますと、キャンパスの隣に、閑静な牧場を確認することができます。現在は、これらは、閑静な住宅地になっています。最寄駅の京王線下高井戸駅か

ら日本大学文理学部へ向かう町並みは、日に日に変化し続けておりますが、古くからの学生街の面影をいたるところに残しております。日本大学文理学部は、新宿・渋谷から10分程度であり、アクセスも良いところだと思います。台風の影響が心配されるのですが、こればかりは、大会準備委員長の日ごろの行いに期待する他はありません。

大会シンポジウムなど詳細につきましては、次回の「会報」でお知らせしたいと思います。天候に恵

まれた秋の良き2日間（であることを祈りつつ）、実り多き教育史学会第58回大会になるべく、スタッフ・院生を中心にこれから本格的な準備を開始いたします。多くの会員の皆様のご支援とともに、ご参加をお待ちしております。

第58回大会準備委員会
小野 雅章（日本大学）

寄贈図書

* 図書

- ・山崎洋子・添田晴雄監訳 『ロイ・ロウ著 進歩主義教育の終焉-イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか』 (株)知泉書館 2013/6/20
- ・米田俊彦(編著) 『論集 現代日本の教育史 1. 教育改革』 辻本雅史監修 (株)日本図書センター 2013/6/25
- ・湯川嘉津美・荒川智(編著) 『論集 現代日本の教育史 3. 幼児教育・障害児教育』 辻本雅史監修 (株)日本図書センター 2013/6/25
- ・小山静子(編著) 『論集 現代日本の教育史 4. 子ども・家族と教育』 辻本雅史監修 (株)日本図書センター 2013/6/25
- ・安川寿之輔 『福沢諭吉の教育論と女性論-「誤読による〈福沢神話〉の虚妄を砕く』 (株)高文研 2013/8/15
- ・『大学教育学会ニューズレター』 No. 94 大学教育学会 2013/9/18
- ・『館報』 第11号 2012年度 玉川大学教育博物館 2013/8/31
- ・『教育学論集9』 筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻 2013/2/25
- ・『日本仏教教育学研究』 第21号 日本仏教教育学会 2013/5/1
- ・『人間と社会の探究-慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』 第75号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 2013/5/20
- ・『京都市学校歴史博物館研究紀要』 第2号 京都市学校歴史博物館 2013/6/1
- ・『教育学研究』 第80巻 第2号 日本教育学会 2013/6/1
- ・『原井郁雄オーラル・ヒストリー 被爆の思い出・戦争のない世界を』 広島大学文書館 2010/12/1
- ・『広島大学自校史教育実務報告書』 2001～2010 (上・下巻) 広島大学文書館 2011/3/1
- ・『「近畿大学の大学アーカイブスと学内資料の収集・保存に関する基礎的研究」研究報告書』 増田大三(研究代表者) 2013/2/1
- ・『学校間接続関係の形成と近代教育政策の地方における受容過程に関する実証的研究 研究成果報告書』 小宮山道夫(研究代表者) 2013/3/1

* 紀要・ニューズレターなど

- ・『大学教育学会誌』第35巻 第1号(通巻第67号) 大学教育学会 2013/5/1
- ・『教育社会史史料研究』第4号 教育社会史資料研究会 2013/1/1
- ・『教育社会史史料研究』第5号 教育社会史資料研究会 2013/7/1



事務局からのお知らせ

1. 事務局移転について

2013年12月1日より、事務局が東北大学へ移転します。会費納入用の口座については変更ありませんが、連絡先等は以下となりますのでご確認ください。

事務局長：八鍬友広 / 事務局長補佐：清水禎文 / 事務局嘱託：八鍬靖子
連絡先 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科
八鍬友広研究室気付
Tel : 022-795-6117
E-mail: jseh@yahoogroups.jp

2. 会費納入のお願い

2013年9月より第57回大会年度がスタートしました。今年度会費および過年度会費をお支払い頂いていない会員の方には、振り込み用紙を同封させていただきました。すみやかな納入にご協力ください。

年会費は「ゆうちょ銀行」(郵便局口座)からの自動引き落としにより納入できます。会員の便宜と事務効率化のため、極力ご協力をお願いします。なお、ご協力いただける方は事務局(新事務局)までお申し出ください。必要書類を送付させていただきます。

3. 会員登録について

現在、次の方々住所不明となっています。お心当たり方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報くださるようお願いいたします。なお、会員登録内容の変更は、ご本人からのお申し出によってのみ変更が可能です。

遠藤華奈子 掛本勲夫 菊地愛美 杉森知也 常本勇治
(順不同・敬称略)

4. 会員登録変更等について

事務局や機関誌編集委員会などからの学会事務にかかわる連絡においては、ご登録いただいた連絡先を使用させていただいていますが、宛先ちがいで戻ってくることがけっこうあります。ご登録いただいた連絡先に変更等が生じた場合、忘れずに事務局までご一報ください。

事務局長 新谷 恭明

教育史学会 会報 No. 114 2013年11月25日

編集・発行 教育史学会事務局 新谷恭明
〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目19-1
九州大学大学院 人間環境学研究院 教育学部門
新谷研究室 気付
電話 092 (642) 3112
電子メール jseh@yahooroups.jp
郵便振替口座 00140-0-552760 教育史学会事務局

印 刷 城島印刷株式会社